〈論文〉

並置と迂言（2）
― There's nothing you can do that can't be done. ―

景　山　弘　幸

0．はじめに

「並置（parataxis）」は，一般的には接続詞なしに 2 つの文が連結される現象を言う。また，「迂言（periphrasis）」は，あえて語を費やして何かを伝えようとする心的プロセスのことを指す。景山（2011）では，「情意」を伝えるべく迂言し，結果として並置を呈する（1）の文を取り上げた。

（1）Poor as he is, he is happy.

（1）における，前半部の Poor as he is は後半部の he is happy と並置されている。「貧しいのに」という話し手の強い情意は，接続詞を介在させない。前半部と後半部の論理的関係は聞き手に委ねられている。前半部内の as he is の部分は，Poor を強調（「本当に」）する迂言要素（無くても情報は足りている）であることを述べた。言い換えれば，話し手の強い情意（貧しいのに）は迂言要素（as it is）の言語化という言語操作（以下，ストラテジーとする）を採用し，さらに接続詞なしの並置ストラテジーで陳述（he is happy）を続ける。論理的関係を示すストラテジー（接続詞の使用）は採られず，きわめて話し手中心の主観的な言語表現となっている。聞き手は，話し手が採るストラテジーとしての要素（as it is）の迂言に感応し話者の情意（貧しさの強意）を共有しながら，論理関係を示す接続詞を介在させない並置ストラテジーで話し手が発出する言語表現の解釈をしなければならない。「貧しいのは不幸せ」という一般的な文化的前提から，最終的な解釈「彼は本当に貧しいのに，幸せだ（驚き）。」に至る。

（2）There's nothing you can do that can't be done.

(2) は，ビートルズの *All you need is love* の歌詞[i]である。(2) は，「二重限定（double restriction[ii]）」を含む文としてしばしば引き合いに出される。第1の関係節 you can do が先行詞 nothing を限定し，さらに第2の関係節 that can't be done が nothing you can do を先行詞として限定するとされる。その解釈は，「あなたにできることなんてない，とりわけ誰にも成されないことはね。(＝何やっても無駄)」というものである。しかし，この歌詞にはもう一つの解釈がある。「あなたができることの中で，なされ得ないものはない。(＝成せば成る)」という意味である。この解釈に至るには二通りの分析が考えられる。一つは，nothing を no と thing（あるいは not…anything）した上で，先行詞を thing とする二重限定と見るものである。第1の関係節 you can do が先行詞 thing（anything）を限定し，さらに第2の関係節 that can't be done が thing（anything）you can do を先行詞として限定し，「あなたにできることの中に誰にも成されないこと，そんなものはない(＝あなたは何だってできる)」というものである。しかしこの分析には nothing をいったん分解する非経済的な手順が含まれている。もう一つの分析は，二重制限（関係節が二つ）とせず，唯一の関係節 that can't be done は先行詞 nothing を限定し二重否定の解釈（誰にもできないことは何もない）を生むものである。この分析で問題となるのは，とり残された you can do が何者かということである。

本稿は，*All you need is love* の正しい歌詞解釈を求めようとするものではない[iii]。本稿の目的はもっぱら言語学的見地から，(2) の you can do が「迂言」要素であり前語（nothing）に「並置」されていると感じられた場合に，コミュニケーションの参与者である話し手・聞き手が託し・託される情意を見い出し，両者によって最終的な解釈である「交渉意」[iv]が共作される現場を垣間見ることである。以下，1節では，迂言が情意表現となりうることを確認する。2節では，メイナード（2000）で提唱される「場交渉論」を援用して you can do の位置に生起する他の要素を検討し，ストラテジーとして並置される迂言要素について検討する。3節では，迂言あるいは並置表現とアメリカ英語およびアイルランド英語との関係を述べる。4節は結語である。

1．迂言と情意の関係

筆者はこれまで，英語における情意表現として（3）にみられる一見「二重目的語構文（double object construction）」に見える言語表現や (4) にみられる一見「虚辞（expletive）」に見える it を含む表現を検討してきた。

（3）**Hit me a homerun.**

（4）**Don't just book it, Thomas Cook it.**

景山（1999, 2003）では，（3）に見られる me は話者の情意を迂言する要素とした。情報として必要な要素は，**Hit a homerun.** で済むのだが，話し手の強い情意（ここでは願望）が迂言要素 me を言語化させたと考える。聞き手は，動詞直後の me の言語化というストラテジーによって，ホームランを打つことと相手（つまり話し手）との受益関係の匂いを嗅ぎ取り，話し手と聞き手の両者が了解する解釈（ホームラン打ってくれると嬉しい）が共作される。また，景山（1990, 2003）では，（4）において話し手は情報的に無意味に思える it を言語化するストラテジーで，直前要素（**book, Thomas Cook**）を動詞化し，同時に聞き手は迂言要素 it（文法書，辞書で「強意の it」とされる）により話し手の強い情意を感じ取ると述べた。

「強意の it」は，日本語における情意の「だ」用法[v]と親和性が高い。（5）はメイナード（***op. cit.***：189）が，情意の「だ」と分析する，漫画（『ひまわり日記』あさぎり夕著）からの例である。

（5）どーせ，ノロマですよぉ……だ。

メイナードは，（5）の「です」が情報（のろまだ）の「だ」であり，末尾の「だ」が主観要素（情意の「だ」）として生起している，と分析する。日本語でも英語でも一見不必要な要素が言語化されると，聞き手は話者の情意を感じ取る交渉に入る可能性が高い。不必要と感じられるのは情報としての貢献がないということである。それなのに語を費やしている（迂言している）には情報以外の貢献があるのではないかと「協調の原理（**cooperative principle**）[vi]」に基づき聞き手は意味の交渉に入る。情報を交渉するのでないとすれば情意の交渉となる。そもそも話者は，情意を何らかのストラテジーを使って言語表現に忍び込ませ，聞き手も参加して解釈を共作する場を作り出すことができるのである。

さて，（2）の文にもどろう。

（6=（2））**There's nothing you can do that can't be done.**

下線部 **you can do** を第 1 の関係節（情報が整った文）というよりも迂言要素（例えば，

強意を喚起する要素）とみなしうる根拠を示す。一つ目は，二重制限とされるにしても第1の関係節に関係代名詞の which あるいは that が顕在する文が少ないという指摘である。

（7）a. Is there anything you want that you haven't got?

b. I repeatedly told her that there was nothing which you could do which I had not already done[vii]. 安藤（2005：192，下線は筆者）

安藤（2005）は,（7b）の例を引きながらも,「なお, 二重限定は,（本稿での（7a））のように, 第一の節は，関係詞を欠く接触節（contact clause）であることが多い（192）」と述べている。接触節であるということは,「並置（parataxis）」構文の可能性を示唆する。実際, Jespersen は，MEG III（7.8 節）で，接触節が並置から生まれた可能性を指摘している。

> It is true（or at any rate highly probable）that our idiom has arisen out of parataxis,（ 中 略 ）Before contact-clauses we have never a pause; the intonation too, of the whole sentence, the clause included, shows unity and is different from that of two independent sentences.

詳細は省くが接触節は関係詞が省略されたものではない。もともと関係詞を介せず前語と緊密に結びついた熟語のようなものである。二重制限と接触節という用語の生みの親でもある Jespersen は，二重制限について述べる中で，接触節の事例と関係詞顕在の事例を多数あげている（MEG III 4.5）。Jespersen が引用する（8）に見られる関係詞顕在事例の第1関係節は，意味内容が濃く情報要素の色合いが強いことが見て取れる一方で，（9）の接触節の場合には情報というよりもむしろ強意を交渉してくる迂言要素と思われる例が多く見られる。仮に（9）を（10）としても情報としては大差ない。they met と I felt は共に「そこに存在する」ほどの意味である。

（8）a. I haue knowne those which haue walkt in their sleep who haue dyed holily in their beds. （Sh Mcb V 1.59）

b. There was very little that I wrote, up to time of his leaving London permanently, which I did not discuss with him. （Roberts M 126）

（9）a. They murdered all <u>they met</u> whom they supposed to be gentlemen.

（Yonge Kings of Engl. 125）

b. as a punishment for every craving <u>I felt</u> that wasn't pure

（Maxwell EG 355）

（10）a. They murdered all whom（or that）they supposed to be gentlemen.

b. as a punishment for every craving that wasn't pure

当該要素が情意に基づく迂言表現である可能性を示す二つ目の根拠は，当該要素の直前要素が all, every ＋名詞の強意語句そして nothing, no one のような否定表現が多いことである。一般に否定は強い情意を伴う心的プロセスであり，否定辞は強意のための迂言要素（not …<u>at all,</u> not <u>a bit</u>）を後続させやすい。Jespersen は，「二重限定は否定表現の後で特に顕著にみられる（MEG III 4.5-3）」と述べている。本節では，当該要素の言語化と話し手の情意と nothing 等の否定表現の親和性を確認しておくことにする。

2．ストラテジーとしての要素の迂言と並置

メイナード（2000）は「情意の言語学」を提唱している。デカルト（René Descartes）に代表される西欧ロゴス主義に基づく言語学に満足せず，反デカルト主義で人文主義，人間主義のヴィーコ（Giambattista Vico）が提唱する解釈学立場（hermeneutics）さらには中村（1996）の「パトスの知」を積極的に評価する。中村の「パトスの知」は以下のものである。

> （パトスの知とは，）他者や世界や環境がわれわれに働きかけを示すものを読み取り意味づける方向で，＜コスモロジー＞と＜シンボリズム＞と＜パフォーマンス＞という３つの構成原理によって成り立っている。いいかえれば，それは，人間をただ単に能動的な存在として，つまり抽象的に，とらえるのではなく，むしろ，意味の濃厚な場のなかで他者からの働きかけを受けた受動＝受苦的な存在であることを出発点とし，自他の関係を相互行為としてとらえるものを指しているのである。
>
> （*ibid.*：306）

メイナード（2000：23）は言語論との関係で，コスモロジーの考え方から「言語と場所の

相関関係」を，シンボリズムから「意味の多義性」を，そしてパフォーマンスから「言語行為の相互作用」を読み取る。場交渉論の詳細と用語については，メイナード（2000：79 ff.）第５章「場交渉論の構想」を参照のこと。以下，本稿で使用する用語の定義のみ記載する。

可能意：記号に慣例上割り当てられている意義素の総体であり，それは，いろいろと具体化される意味の可能性の集合である。

情報：可能意が実際に使用される場合，それが主に命題領域で交渉されると，情報が前景化される。

情意：一方可能意が表現領域に投射すると，情意が得られる。

交渉意：情報と情意は相互に交渉しあい，その結果得られるのは＜交渉意＞である。（中略）われわれが日常，言語の意味を解釈するとは，この交渉意を承知しているのである。（*ibid.*：82-83）

メイナード（2000：第５章，第８章）によれば，可能意は「認知の場」で話者と聞き手の間で情報が交渉され，「表現の場」において情意が交渉され，「相互行為の場」で交渉意が共作（意味解釈）される。ストラテジーとは，さまざまな言語操作の方策である。本稿が表題としている「並置」と「迂言」もそれぞれがひとつのストラテジーである。「並置（parataxis）」は，一般的には接続詞なしに２つの文が連結される現象を言うが，本稿では「接触節（contact clause）」も並置現象とみなす。また，「迂言（periphrasis）」は，一般的には bigger に対する more beautiful（迂言比較級）のように通常よりも語を多く費やす現象を指すが，本稿では何かを伝えようとして，あえて（つまり情報的には価値が低くても）語を費やす心的プロセスを迂言とする。

本稿の課題文（(11) として再再掲）において，並置かつ迂言である可能性がある部分が下線部 you can do である。*All you need is love* の歌詞は，(12) にあげる (11) と並行する表現が続く。

(11=（2）（6）) There's nothing <u>you can do</u> that can't be done.

(12) a. Nothing <u>you can sing</u> that can't be sung.
b. Nothing <u>you can make</u> that can't be made.
c. No one <u>you can save</u> that can't be saved.

d. Nothing <u>you can know</u> that isn't known.

e. Nothing <u>you can see</u> that isn't shown.

作詞したジョン・レノンが言葉遊びしている可能性があることはさておき，（12a-c）は同一動詞の同一助動詞による肯定･否定という同じストラテジー（前半で can，後半で can't）が採られている。本稿では，下線を施した肯定の前半部は直前の語句（nothing）に対する接触節（つまり並置）であり，その引き金は直前の語句（nothing）に託される話者の情意（ここでは「（行為とか歌とか何がかはともかく）存在しえない」という強意）の迂言とする可能性を見ている。しかしながら，この歌の聞き手となる者は，比較的抑揚のない歌唱により，下線部要素が強勢ある前語（nothing）の迂言（情報はさほど重要ではない）というよりは情報を持つ関係節として「行為／歌唱／製作／救済ができない」と解釈したくなる。そこに that can't be done/sung/made/saved と聞かされ，慌てて，先行詞 nothing は後半の関係節に修飾されている二重否定の解釈（「行為／歌唱／製作／救済，なんだってやればできるのか」）の可能性に翻弄されながら歌を聴き進める。前半部の動詞 do/sing/make/save が，後半の関係節中の動詞の先取りであるところが巧みなストラテジーである。聞き手は 3 番歌詞の（12d）と（12e）でもうひとひねりされる。前半の下線部は同様に can であるが，後半の関係節中では can't ではなく isn't である。動詞の先取りは同じであるが，今度は可能性あるいは希望（やろうと思えばやれないことはない）の交渉意がキャンセルされ，割り切りあるいは諦念（やろうとおもってもすでに現実は晒されている）の交渉意が優位となる。希望があっても「愛」，諦めても「愛」と聞かされる。

二重制限と呼ばれる構文をよく観察してみると，前半の要素が限りなく「存在」に関わる語句であることが分かる。すでに，前節（9）の例文について指摘したことであるが，以下の例文は，Jespersen（MEG III 4.5-2,3）による（下線は筆者）。

（13）a. Is there anything <u>you want</u> that you have not? （Di Do 329）

b.（=（9a））They murdered all <u>they met</u> whom they supposed to be gentlemen. （Yonge Kings of Engl. 125）

c.（=（9b））as a punishment for every craving <u>I felt</u> that wasn't pure （Maxwell EG 355）

d. There was nothing <u>in life</u> which Dorothy might ask him then to do which he could not have accomplished. （Holmes A 45）

(13a-c) の下線部は, それぞれ「望むものとしての存在」「出会う存在」「実感する切望の存在」という意味合いが認められる。下線部は，情意の色濃い直前の語句（anything, all ,every craving）の迂言要素（「在る」）とみなしうる。場交渉論で言えば，下線部は認知の場で情報（「望む」「出会う」「実感する」）を交渉すると同時に, 共通して持つ存在の意義素（「在る」）が表現の場において直前要素の迂言という情意（在りうるか否か）としても交渉される。(13d) をみてみよう。この文は紛れもなく関係詞が顕在する二つの関係節（which Dorothy might ask him then to do と which he could not have accomplished）を持つ二重限定の例である。先行詞 nothing は迂言要素として in life を言語化している。本稿での課題例文 (2) の多義性は, 話し手と聞き手が情報と情意の交渉において, 認知の場 (情報) と表現の場（情意）を行きつ戻りつする（あるいは光のあたる場が点滅する）ところに起因すると考える。その解釈（交渉意）はとりわけ異なる場面（時と場所）に存在する聞き手の交渉次第で揺らぐところが非常に興味深いのである。nothing という情意表現の直後の位置には迂言要素が出没しやすい。認知の場で聞き手は情報を交渉しながらも同時に表現の場で情意を交渉する。本稿の課題文（2）および二重限定とされる現象を十全に味わうには，存在に関わる there 構文と存在要素の迂言を考慮してみるのがよい。存在に関わる否定辞の nothing そして疑問文中の anything は, 情意を担いやすい要素で, 迂言要素 (存在の有無の強調）を後続させやすい。存在に関わる迂言要素を探して，アメリカ英語およびアメリカ英語に強い影響力を持つアイルランド英語を観察してみよう。

3．アメリカ英語とアイルランド英語

藤井（2006：51）は，アメリカ英語特有の表現の一つとして（14）の例（日本語訳含む）を挙げている。

（14）a. Now just speakin' as one man to another, there ain't any money <u>in it</u>.
打ち明けたところを言うとだね，お金がぜんぜんないんですよ。
b. One night she dreamed that she saw an island with a blessed well <u>in it</u> that would cure her soon.
ある夜彼女は息子の病を治すご利益のある泉があるという島の夢を見た。

藤井によれば in it はゲール語の副詞 *ann*（= E. in existence）に由来するとしている。下線部の in it は，削除しても意味は伝わる，つまり情報としてはあまり貢献していない。

筆者は，in it の言語化（迂言）によって「存在」の有無が強い情意として交渉されるのではないかと推察する。(14a）では「お金の非存在」が強調され，(14b）では「泉の存在」が強い情意表現として交渉されていると考える。藤井も紹介しているように市河（1954）は同種（15）の例を挙げ，これを Irish –English（アイルランド英語）の語法としている。

（15）a. It's hard set we'll be from this day with no one <u>in it</u> but one man to work.
b. There's no man <u>in it</u> to make the coffin.
c. Will I be <u>in it</u> as soon as himself?

この三つの例における“in it”は別に何の意味もなく，ただ存在を表わすだけの一種の expletive だろうと思う。何か Gaelic 語の影響だろうと思うが今明らかにすることができない。Here とか，there とかで言い換えて當ることが多い。(*ibid.*：215)

（15）の例において，迂言要素と見られる in it が並置される前語は，no one, no man, 疑問 +be である。迂言要素が存在の有無を強い情意（強調）を伝えているものと見られる。筆者は，この存在に関わる迂言表現と本稿課題例文（2）の you can do という迂言表現の情意交渉には共通点があると考える。確かに you can do のほうが，in it よりは情報量が多いと言えるが，それでも There is nothing you can do だけでは情報の交渉としては不充分であろう。情報的に価値が低い要素が言語化されると聞き手は話者との情意交渉に入るのだと思う。

「利害の与格（dative of interest)」の一種で利害の意味が薄れた「感興の与格（ethical dative)」の例とされる（16）もアメリカ英語の特徴（「余分な再帰与格」）とされる。

（16）a. I think maybe I could get <u>me</u> a half a dollar somewhere.
b. We'll go hunt <u>us</u> a buck today, Jody. 藤井（2006：170）

これらの表現が，聞き手の情意交渉に一役買っていることは，市川（1954：40ff.）がすでに指摘している。

・・・これはその述べる事柄の中に話者または聞手の interest があることを示すためで，多くの場合にはほとんど superfluous になっている。これのあるとないとで

は大した差を生じないが，ただこれを入れると文に emotional element がはいり，hearer の注意を促すことになる。Me の外に you を用いることもある。

（*ibid.*：40）

（17）Here is an unbelieving Pagan <u>for you</u>, gentlemen!　（*ibid.*：44）

（17）の for you は現代英語で与格が目的格と同じになってしまったため，前置詞 for を加える与格の迂言形式である。その効果は，「ほら」のような聞き手の注意を促す，言い換えれば話者の情意（見て！聞いて！）を聞き手に交渉するストラテジーといえる。景山（1999）は，（16）の類の表現において言語化される与格は原則として話者（me, us）と聞き手（you）という発話場面の参与者であることを述べ，さらに発話場面の参与者が言語化されることで表現が主体化されることを述べた。本稿に則して言えば，情報として無価値な話し手（一人称代名詞）・聞き手（2 人称代名詞）が言語化されるのは話し手の情意の迂言として聞き手に解釈されるということになる。

アメリカ英語に対するアイルランド英語の影響については，藤井（2006）のまえがきの一部を引用する。すでに英語系移民としてアメリカ大陸に入っていた多くのアイルランド系移民がアメリカ英語の形成に大きな役割を果たし，アメリカ英語がイギリス英語と一線を画す自前（情意交渉が容易）の言葉となっていった歴史が浮かび上がる。

19 世紀末に Mark Twain が，イギリス文学の伝統を断ち切って，言語的にもアメリカ英語として独立宣言したいという心意気をもって書いたと思われるのが，代表作 *The Adventure of Huckleberry Finn*（1884）です。彼がこの作品で写し出した英語はアイルランド英語の特色をふんだんに含みもっています。しかし，結局その英語は矯正すべき低俗英語と見下され，清教徒的支配階層からは学習には値しないと断罪されるのみでした。20 世紀半ばに J.D.Salinger が出した *The Catcher in the Rye*（1951）の英語の特色も，そのほとんどがアイルランド英語の特色と共通するものです。イギリスの伝統英語しか学ぶ対象としていなかった日本の英語学習者の多くは『ライ麦畑』の英語に大変驚きました。しかし，まもなくあの英語は広く北米の教育ある青年たちの日常英語であることが明らかとなり，したがってこの種の英語はアメリカ英語を学ぶ上で決して疎かにしてよい領域ではないことが分かりました。　（*ibid.*：3）

上の引用中にあるサリンジャーの『ライ麦畑』に出てくるアイルランド英語特有の表現は，（18）の下線部にみられる。

（18）a. Just give me two bucks, <u>is all</u>.
（2 ドルくれって，言ってるだけさ）
b. but it doesn't last too long, <u>is what I mean</u>.
（でも，あんまり長続きしない，と言ってんだよ）
c. I figured I'd sleep in that crazy waiting-room where all the benches are. So <u>that's what I did</u>.
（待合室にはベンチがみんなあるから，あそこで寝ようと考えたんだ。で，本当にそうしたんだ）
d. Finally, what I decided I'd do, <u>I decided I'd</u> go away.
（しまいに何をする決心をしたかというと，どこか遠くへ行ってしまおうと決心したんだ）
e. he's my brother <u>and all</u>.
（彼は一応僕の兄貴でさあ…）
f. He had the grippe <u>and all</u>.
（彼は風邪を引いちゃったりしてた）

安藤（2005：28-29）は，（18a,b）の類の例は口語に限られること，is の前コンマがないものもあるがポーズは置かれるはず，と述べている。本稿の視点からすると，（18）の下線部は，まさに並置構文であり，話し手の情意の迂言である。（18c）の下線部はピリオドの後で独立しているが，コンマで前文に並置される文（We're mismatched, *that's all.* − Salinger, *Uncle Wiggily*）も多く見られる。藤井（2006）は，（18a,b）だけでなく，（18c,d）もアイルランド英語特有の表現であることを指摘している。

> P. W. Joyce（pp.10-11）によりますと，アイルランドでは例えば“He is a great old schemer, *that's what it is*.”とか“He hit me with his stick, *so he did*.”“it is a great old scheme, *so it is*.”などのように，前文を繰り返して陳述を強調する習慣があります。（*ibid.*：222）

「前文を繰り返して陳述を強調する」のはまさに話し手の情意が迂言要素を言語化する現

象である。しかも，接続詞なしの並置ストラテジーが採られている。(18e,f) の and all は，口語で発音される場合には，an' all あるいは an' a' と縮約されることがあることから and は接続詞というよりは文法化[viii]された決まり文句の一部となっていることが窺える。そうだとすれば，前文に並置されていると言えなくもない。話し手の陳述緩和，つまり断定するのではなく陳述をぼかすという情意の迂言とみなすことはできる。

上述したように「接触節」も接続詞なしの並置とみなせるのだが，アイルランド英語には接触節の例がたくさんあり，アメリカ英語の口語にも見られる（藤井 (2006)，市河 (1954) 参照)。

(19) a. There ain't nobody <u>can run</u> a guy name of Graves outa this country.
b. I was the man <u>set fire</u> to the place. （以上，藤井 *op.cit.*：223）
c. Where is the bit of new rope, Cathleen, <u>was bought</u> in Connemara?
d. There's some one <u>wants to see</u> you. （以上，市河 *op.cit.*：211-212）

(19) の文は，「共有構文（apo coinou)」とも呼ばれる。(19a) で言えば，nobody は前の There ain't nobody の構成要素であると同時に後ろの can run の主語として共通に用いられている。現代英語では，接触節の例である (20) のタイプ（共有要素 the watch が目的格）しか認められないのだが，(19) のタイプは実際に口語で使用される。

(20) I have lost the watch <u>I bought</u> yesterday. （市川 *op.cit.*：212-213）

共有構文ストラテジーを意図的に採用して多義性を意図的に持たせ，聞き手（読み手）に何らかの情意交渉を挑む詩人[ix]も存在する。

4．結語

本稿では，(2) の例文を契機として，並置と迂言を含む言語表現が多義的に解釈される様子を場交渉論の考え方を使って見てきた。言語表現には，それがもたらしうる潜在的な「可能意」があり，この可能意が話し手・聞き手の間で交渉されてその場の解釈「交渉意」が共作される。その共作の過程で，認知の場において情報が交渉され，表現の場において情意が交渉され，相互行為の場で「交渉意」が産み出される。全ての場においてさまざまなストラテジーが使われている。必ずしも一つのストラテジーが一つの交渉のみに寄与す

るわけではない。話し手は，意図的に迂言並置要素を情報交渉と情意交渉に滑り込ませることもできるし，意図せず強い情意により迂言並置要素を言語化させてしまうこともある。また，聞き手が，ストラテジーの無知等さまざまな理由で，どこかの交渉で折り合いがつかず交渉意が不成立（miscommunication）になったり，成立していない交渉意を誤解（misunderstanding）することも，コミュニケーションにおいてはありうるということである。

言語も記号の一つであり，言語藝術が成り立つ。絵画等の空間藝術，音楽等の時間藝術と同様に，使用される記号操作（ストラテジー）はさまざまである。発信者のステラテジーに関する知識，発信者のコンテキスト（場，その時の人格，時代）と，受信者のそれらが複雑に絡み合って解釈が（時に発信者不在の中で）共作される。メイナード（2000：5.2 節）で詳述されている，パース（Charles Sanders Peirce）の記号（sign）の三要素（representamen, object, interpretant）を確認して本稿を閉じる。それぞれ，representamen は言語記号，object は representamen が言及する実体，interpretant は object に未知の意味（情意を含む）を与える介在項としておく。

> Sign とは現実のまたは架空の何でも，それがある価値をとることができるものであれば何でもいいのだが，それは何かすでに認められたそれ自体以外のものに関連して作用するものでなければならない。しかも，sign はもう一つの interpretant と呼ばれる sign を通して，object について何らかの未知の情報を意味づける可能性を持ったものである。従って，sign と object と interpretant の間には三角関係が結ばれる。（Parmentier 1985：26）

> 場交渉論の言語記号は，このパースの記号論を基盤とし，記号の意味には，情意などを含めた interpretant としての意義が順次累積したものが含まれると考える。つまり，＜情報＞や＜情意＞が記号の＜交渉＞を経て，具現化し，それらが再び代理表現となって，さらに意味を創造していく。このように考えると，言語の意味がいかに複雑なものか知れるのだが，それを可能ならしめているのは，やはり，コミュニケーションの場で相互に行為し続ける言語主体と相手とのやりとりに他ならない。（後略）（メイナード *op.cit.*：90）

注

i　歌詞全体は，以下の通り。

All You Need Is Love
John Lennon

Love, love, love・・・・

There's nothing you can do that can't be done
Nothing you can sing that can't be sung
Nothing you can say
But you can learn how to play the game
It's easy

Nothing you can make that can't be made
No one you can save that can't be saved
Nothing you can do
But you can learn how to be you in time
It's easy

All you need is love
All you need is love
All you need is love, love
Love is all you need

Nothing you can know that isn't known
Nothing you can see that isn't shown
Nowhere you can be
That isn't where you're meant to be
It's easy

All you need is love
All you need is love
All you need is love, love
Love is all you need

ii　二重制限（double restriction）は，Jespersen（MEG III）の用語である。

iii　言語表現の解釈は，話し手，聞き手，場面（時と場所）の相互交渉によりなされる。*All You Need Is Love* の解釈については，佐藤（1989）の指摘が大いに参考となる。

「オール・ユー・ニード・・・・・・」のケースでいうと，あの詞は，少なくとも三つのコンテクストの球体に囲まれている。

1．曲の雰囲気（場のレベル）
2．ジョンの詩の 1967 年展開（パーソンのレベル）
3．その年のジョンの詩を，そのように動かした「時代」。特に，あの時代「ラブ」という語がひきずっていた，かなり特異な思い（文化のレベル）。

それら最低三つのコンテクストに正しく感応してはじめて，あの時のあのジョンが，人類史上初の世界同時テレビ中継番組『アワ・ワールド』で，世界に送ったメッセージを，そのままダイレクトに受け止めることができるわけだ。（*ibid.*：30-31）

また，ジョン・レノンの歌詞（他の歌含む）特徴の記述（注釈含む）には，言語操作のストラテジーが盛りだくさんである。

1．言葉遊び　―　しゃれと地口が増殖し，多義性とナンセンスが支配している。
2．サイケデリック・トリップへの招待。
3．リラクセーション　―　“nothing to do”とか“it doesn't matter”という種の言葉が目立つ。倦怠と流動。社会的自己の消散。
4．ランダムな言葉の機関銃。
5．引用とパロディ。（*ibid.*：32-33）

iv「交渉意」さらに「情報」「情意」は，メイナード（2000）で提唱されている「場交渉論」における用語である。2 節で紹介する。

v「だ」の用法については，野田（1997）も参照。

vi「協調の原理（cooperative principle）」は，Grice（1975）の用語。会話の参加者は，「会話のそれぞれの段階で，そのときの会話の目的ないし方向から要求されるように，貢献せよ」という原理。本稿に則して言えば，話し手と聞き手が意味を共作するとも言える。

vii（7b）の文は Jespersen（MEG III 4.5-3）でも引用されているドイルの『シャーロックホームズ』で出てくるセリフである。第 1 関係節で関係代名詞（which）が言語化されているのは，安藤（*ibid.*）が与えている文意（君にできて，ぼくがすでにやっていないようなことは何一つない，と彼女に何度も言ったんだ。）から見て，話し手の繰り言に反映される強い情意によるものと考える。つまり，今回は情意の迂言というストラテジーにさらなるストラテジー（関係詞の顕在化）を重ねた結果，情意だけでなく情報要素（ないったらないんだ，君にできることなど）をより前景化された現象と考える。Jespersen が引用する否定表現の後位置で関係詞が顕在している例も同様に考えられる。

viii「文法化（grammaticalization）」が進むと，名詞，動詞のような内容語は意味の希薄化を伴いながら機能語に変化してゆく。最終的には「感情」を表わす間投詞に近づく（Traugott, E.（1995）参照）。

i．智恵子は東京には空がない<u>と言う</u>　（「言う」という動詞用法）
ii．貼り紙禁止<u>という</u>貼り紙　（接続詞的用法）
iii．おまえ<u>という</u>やつは！　（感情を表わす間投詞的用法）

ix 現代詩人の中には，あえて共有構文を用いて聞き手に多義性ほかを感じさせようとする者もいる。Amitai（1986）は，いったん廃れた共有構文をあえて使用する詩人 Audre Lorde について研究してい

る。Audre Lorde はカリブ系アメリカ人の作家で白人男性社会に痛烈な批判をしている。彼女は，非標準的とされる共有構文というストラテジーの採用で聞き手（読み手）に情意交渉しようとしているように思える。

参考文献

Amitai F. Avi-Ram. 1986. Apo Koinou in Audre Lorde and the Moderns: Defining the Differences. In *CALLALOO* No.26. The Johns Hopkins University Press.

安藤貞雄 . 2005.『現代英文法講義』開拓社 .

藤井健三 . 2006.『アメリカの英語』南雲堂 .

Grice, H.P. 1975. Logic and conversation. In P. Cole and J. L. Morgan（eds.）, *Syntax and Semantics 3*. Academic Press.

市河三喜 . 1954.『英文法研究』研究社出版 .

Jespersen, O. 1961. *A Modern English Grammar. Part III*. Alden & Mowbray Ltd.

景山弘幸 . 1990.「Don't just book it, Thomas Cook it についての覚え書き」『札幌大学女子短期大学部紀要』第 34 号

景山弘幸 . 1999.「話者と二重目的語構文」 葛西清蔵編『英語学と現代の言語理論』北海道大学図書刊行会

景山弘幸 . 2003.「目的語と情意表現についての試論」『札幌大学女子短期大学部紀要』第 41 号

景山弘幸 . 2011.「並置と迂言（1）－ Poor as he is, he is happy. －」『札幌大学総合論叢』第 31 号

メイナード , 泉子 K. 2000.『情意の言語学』くろしお出版 .

野田春美 . 1997.『「（の）だ」の機能』くろしお出版 .

Parmentier, R.J. 1985. Sign's place in medias res: Peirce's concept of semiotic mediation. In: E. Mertz and R. Parmentier（eds.）, *Semiotic Mediation: Sociocultural and Psychological Perspectives.* Academic Press.

佐藤良明 . 1989.『ラバーソウルの弾み方』岩波書店 .

Traugott, E. 1995. Subjectification in Grammaticalization. In Stein, D and S. Wright（eds.）*Subjectivity and Subjectivization.* Cambrdge University Press.